

限界集落において住民と多機関が一体化した農福連携 —地域の問題解決を図る「鈴ヶ沢モデル」—

A Collaboration between Agricultural and Welfare that Residents and Multiple Institutions became one in Marginal Village: the “Suzugasawa Model” to solve local problems

合 田 盛 人*

Morihito GOUDA

はじめに

現在、厚生労働省では地域共生社会の実現に向けて「地域丸ごとのつながりの強化」の主な取り組みの1つに、保健福祉・雇用分野の既存事業において、農福連携の活用により就労・社会参加や健康づくりを推進している。これまでに報告された農福連携の取り組みでは、就労・社会参加や健康づくりだけでなく、農福連携を活用した地域問題の解決やまちづくりなども報告されている¹⁾。厚生労働省・農林水産省は「農福連携の取組は、地域における障害者や生活困窮者の就労訓練や雇用、高齢者の生きがい等の場となるだけでなく、労働力不足や過疎化といった問題を抱える農業・農村にとっても、働き手の確保や地域農業の維持、更には地域活性化にもつながる」としている²⁾。農福連携には、地域問題の解決や地域を創生する可能性があるとして期待が高まっているところである³⁾。しかし、昨今の社会問題である限界集落⁴⁾においては、いまだ農福連携を活用した研究報告は見当たらない現状である。限界集落については、国土交通省が「前回調査と同様、山間地集落において集落機能が低下している、あるいは機能維持が困難となっている集落の割合が特に高く、さらにそれぞれの割合も前回調査から増加しており、集落機能の維持が困難になっている状況がうかがえる」と報告している⁵⁾。この報告書等からわが国では限界集落は全国的に拡大しており、そしてその実態は深刻な状況を迎えていることが伺える。

そこで、先行調査(合田、2019)⁶⁾では、限界集落といわれた長野県阿南町鈴ヶ沢において、多機関の活動が融合し農福連携を活用して、限界集落の問題解決をめざしている取り組み「鈴ヶ沢モデル」⁷⁾があることを報告した。この調査において、多機関である阿南町社協事務局長K氏、おひとよし倶楽部I氏(以下:I氏)、阿南町集落支援員(元地域おこし協力隊員)IN氏(以下:IN氏)、就労支援センター所長H氏・農業担当職員T氏の聞き取り結果から、この取り組みは集落で暮らす住民(以下:住民)の思いと多機関の活動が一体化したものであるということが想定された。そこで、本研究では、住民へ聞き取り調査を実施し、この取り組みが地域の問題解決を図るため、住民と多機関の活動が一体化したものであるかどうかを明らかにすることを試みた。

1. 研究の目的および方法

1-1 研究の目的

本研究は、鈴ヶ沢モデルが限界集落の問題解決を図るため、住民と多機関が一体化している取り組みであることを明らかにするものである。

1-2 研究の方法

1) 調査対象者

研究者から多機関に対して、住民の中でも鈴ヶ沢モデルの中心的な役割や活動を担っていた方々の選出を依頼した。結果、I氏へ伝統野菜の種を譲渡した住

民A氏(以下:A氏)と伝統野菜を栽培する圃場を提供した住民B氏(以下:B氏)を調査対象者とした。調査時点で、A氏は町内の高齢者施設に入居しており、B氏は同地区で在宅生活を継続していた。

2)調査方法

まずは、多機関の協力を得て調査対象者に対して書面による調査説明を行った。承諾が得られた調査対象者に対して、再度、研究者から口頭と書面にて調査の趣旨説明を行った。調査では、調査対象者の基本属性に関する聞き取りを行い、その後、質問項目①鈴ヶ沢が限界集落と報道されたとき、②阿南町社協(農業おたすけ隊)から農業のお手伝いをするといわれたとき、③阿南町社協(おひとよし倶楽部)から伝統野菜を栽培するといわれたとき、④伝統野菜の名前(鈴ヶ沢なす)をきめたとき、⑤伝統野菜を栽培する農法(米ぬか農法)をきめたとき、⑥伝統野菜を販売することになったとき、⑦就労支援センター(障害者の方々)が伝統野菜を栽培することになったとき、⑧現在の活動について、⑨その他、思うことを聞き取りした。質問項目については、先行調査(合田、2019)を参考に、この取り組みの経過において、住民と多機関がかわったインシデントを中心に作成した。

聞き取りにかかる時間は、30分から1時間程度とした。聞き取りの実施には、事前に調査対象者には聞き取り調査の質問項目を読んでもらい、その後、個別の半構造化面接を実施した。聞き取りの記録については、手書きのメモと記録をより正確にするという目的でICレコーダーを使用した。

3)調査期間

20●●年4月から同年5月までを調査期間とした。

4)分析の方法

社会を効果的に読み解く技法(西山他、2013)⁸⁾を参考に、本研究で行った聞き取り調査で得られた回答と先行調査(合田、2019)で得られた多機関からの回答を一覧表によって整理し比較分析した。分析結果については、実践研究を専門にしている研究者1名から助言指導を受けた。

5)倫理的配慮

調査対象者には、口頭と書面によって、本研究の趣旨説明を行い同意書を得た。調査対象者の一部に、日常生活に困難のある方を対象とするので、その方への説明時には、本人の承諾のもと、可能な限り本人の代弁機能を果たせる方の同席を設定した。仮に、調査協力をしない場合であっても、今後の生活や福祉サービ

スの利用には何ら影響しないことを説明した。

個人情報漏洩の予防対策としては、以下の6点について厳守した。①論文等で記載する固有名詞はアルファベット化し、インタビューした年は「20●●年」とする。②インタビューの回答については、逐語記録を用いない。③質問内容以外のプライバシーに関する回答があった場合は、テキストデータとはしない。④調査対象者に不利益を及ぼすおそれがあると考えられる記述については、削除や内容の主旨にそれない範囲で加筆等の修正を行う。⑤ICレコーダーのデータを本研究終了後に処分する。⑥調査対象者に対し、何らかの不快感や困惑、または精神・心理的な負荷や危害を及ぼす可能性があり、個人の本質に関わる情報を収集する調査であることから、調査開始前に長野大学倫理審査委員会から承認を得ていることを説明した(承認番号:2018-017)。学会等への発表については、特に①、②、③、④を厳守することとした。

2. 調査結果および分析

2-1 調査結果

1)調査対象者の基本属性

A氏、B氏ともに80歳代の女性で、鈴ヶ沢での居住年数が60年を超えている。また、鈴ヶ沢なす・うり・南蛮の栽培経験は、鈴ヶ沢での居住を始めてから継続されており60年を超えている。A氏は町内の高齢者施設に入居するまで栽培しており、B氏は同地区で現在も継続して栽培している。A氏が、鈴ヶ沢なすを自家採種し育苗して、住民に苗を配っていたが、ある時期からB氏も自家採種し育苗するようになった(表1参照)。

表1 住民A氏・B氏の基本属性

	A氏	B氏
性別	女性	女性
年齢	80歳代	80歳代
鈴ヶ沢での居住年数	62年	60年
鈴ヶ沢なすの栽培経験	有、62年	有、60年
鈴ヶ沢うりの栽培経験	有、62年	有、60年
鈴ヶ沢南蛮の栽培経験	有、62年	有、60年

2) インシデントごとの回答

この取り組みの経過において、インシデントごとのA氏、B氏の回答は以下のとおりであった。

①鈴ヶ沢が限界集落と報道されたとき

「一人暮らしになって、どこかにお世話にならないとここにはずっと住めないと思った。住めるならいつまでも住みたいと思っていたけれど、役場から鈴ヶ沢は限界集落でこれからは雪かきなども難しくなるから、山を下りて団地にて集団生活をし、夏になれば希望者は山に戻り畑をするというのはどうかと提案された。団地を視察後に、当時の住民30人くらいが集まって<残る>か<行く>かの投票をした。1票差で<残る>ことになった。私は行きたくなかったの、やれやれと、嬉しかった。行きたい人にはわるいが、『良かった』と思わず叫んでしまった。ここでがんばって残ると思った。一人になってもがんばっている。住めば都で60年生活している。田んぼから畑から一生懸命がんばってきたつもり」ということであった。

②阿南町社協（農業おたすけ隊）から農業のお手伝いをするといわれたとき

「嫁いで来たときに姑がなすを代々栽培していて、これはいいと思ったところ、姑から栽培することをすすめられた。それから、自分で種採りをして栽培して、こんなことしていいのかなあと思っていたが、それで良かったのだと思った。社協職員が、一緒に家の前の畑でなすを作ろうと言ってくれたのが始まりで、手伝ってくれて、うれしい、助けてもらえて、ありがたい、お願いした」ということであった。

③阿南町社協（おひとよし倶楽部）から伝統野菜を栽培するといわれたとき

「I氏が何もかもできる人で、研究家だと分かっていたので、お任せして私はお手伝いした。I氏が苦勞してくれて、ありがたかった。こんなうれしいことはないと思った。うれしくて、家に帰ってきて泣いた」ということであった。

④伝統野菜の名前（鈴ヶ沢なす）をきめたとき

「みんなで栽培して、誰が決めたわけでもなく鈴ヶ沢なすという名前になった。この地域の名前が載ればうれしい。それはいいことだ。集落の名前が残る」ということであった。

⑤伝統野菜を栽培する農法（米ぬか農法）をきめたとき

「それまでも栽培する前年には堆肥を作っていたから。I氏から説明を受けて、いいことだと思った」ということであった。

⑥伝統野菜を販売することになったとき

「それまでは、自分の家で食べて、あまったら家に来た人にあげていた。まさか売れるとは思っていなかった。みんなで収穫した野菜をI氏にお願いして売ってもらうことにした。このなすがお金になるのかと思った。なんといいことをしてくれるのだとうれしく思った。じゃあ、私も頑張って栽培しようと思った」ということであった。

⑦就労支援センター（障害者の方々）が伝統野菜を栽培することになったとき

「（就労支援センターの伝統野菜担当の利用者が）10人ぐらい、ちゃんと作業をしてくれていた。よく働いてくれると思った。利用者が大勢で『なす作りに来たよ』と言って、家まで来てくれた。お茶を飲みながら、利用者が自己紹介してくれて、仲良くなった。夫が亡くなって、農作業ができなくなって、畑が草だらけにならないようにしなければならなかったと思っていたときに、I氏から畑を貸してもらいたいと言われ、提供したが、栽培してくれてありがたかった」ということであった。

⑧現在の活動について

「IN氏が一生懸命になってやってくれている。五平餅とか焼きなすとか上手に作ってくれて、おいしかった。集まりに何回も行って、小学生や大学生や30人くらい集まることもあった。私の家にも何回も何回も来てくれて、漬物とか食べて『おいしい、おいしい』と言ってきて、喜んでくれて、それが、嬉しい。施設に入所することになったときは、IN氏に『あとは頼むね』と伝えた。本当に、ありがとうございます、感謝している。東京から一流の料理長が来て、なすがこんなにめずらしいご馳走になるのだと思った。お寺（会場）でにぎやかに、御馳走になった。この家にも、いろんな人が来てくれて、幸せだった。誰も来てくれなかったら、夕方までぼつんと一人で居るだけ。まさか、ここの野菜が伝統野菜になるとは思わなかった。野菜が儲かる、儲からないは第二で、人が来てくれるのがうれしい。大勢の人と友達になれた」ということであった。

⑨その他

「IN氏がときどき来てくれて元気になる。IN氏が、地域おこし協力隊の任期（終了）がきたときには案じていたが、『私はここに残るよ』と言ってきてよかった。就労支援センターのT氏（農業担当職員）もここに住んでくれて、ありがたいことだ。できれば、こういうことが続けられたらいいと思う」ということであった。

2-2 調査結果の分析

インシデントごとのA氏、B氏と多機関とのテキスト

データを整理したのが表2である(表2参照)。両者のテキストデータを比較しながら、取り組みの過程で住民と多機関が一体化しているかどうかを以下読み解いていく。

鈴ヶ沢が限界集落と報道されたことを発端に、住民の中では、集落に残るか山を下りて団地にて集団生活

をするか、2つの意見が拮抗していた。住民投票の結果、1票差で集落に残ることになった。しかし、限界集落での生活を存続するには、何らかの社会的な支援を利用していかなければならないと考えられた。

そこで、多機関の1つである阿南町社協では、まずは住民が限界集落と報道されたことに塞ぎ込んでい

表2 多機関と住民のテキストデータ一覧

インシデント	多 機 関	住 民
① 鈴ヶ沢が限界集落と報道されたとき	もう駄目だといわれたように受け取った集落の住民みんなが、生き甲斐をなくして、ここに住んでいることがいいのだろうかと思いついてしまった。社協職員にも会ってくれる状況ではなかった。	一人暮らしになって、どこかにお世話にならないところにはずっと住めないと思った。住めるならいつまでも住みたいと思っていたけれど。 役場から鈴ヶ沢は限界集落でこれからは雪かきなども難しくなるから、山を下りて団地にて集団生活をし、夏になれば希望者は山に戻り畑をするというのはどうかと提案された。団地を視察後に、当時の住民30人くらいが集まって〈残る〉か〈行く〉かの投票をした。1票差で〈残る〉ことになった。私は行きたくなかったもので、やれやれと、嬉しかった。行きたい人にはわるいが、「良かった」と思わず叫んでしまった。ここががんばって残ると思った。一人になってもがんばっている。住めば都で、60年生活している。田んぼから畑から一生懸命ががんばってきたつもり。
② 阿南町社協(農業おたすけ隊)から農業のお手伝いをするといわれたとき	高齢者が最期まで在宅で暮らせる形をつくっていくため、社協はこれから離農と荒廃農地の課題解決に向けて高齢者農家を支援するということで、職員やI氏が何回も訪問して「なすが大事だ。うりが大事だ」と伝えていった。それでまた元気になってくれた。	嫁いで来たときに姑がなすを代々栽培していて、これはいいと思ったところ、姑から栽培することをすすめられた。それから、自分で種採りをして栽培して、こんなことしていいのかなあと思っていたが、それで良かったのだと思った。 阿南町社協職員が、一緒に家の前の畑でなすを作ろうと言ってくれたのが始まりで、手伝ってくれて、うれしい、助けてもらえて、ありがたい、お願いした。
③ 阿南町社協(おひとよし倶楽部)から伝統野菜を栽培するといわれたとき	地域で受け継がれてきた様々な地域資源を山里の恵みとして後世に残していこう「残したい、伝えたい、山里の恵み」という理念。在来の野菜の存在と足るを知るといふ思いこそが、この集落固有の地域資源である。この地域資源を残すことが鈴ヶ沢集落を残すことにつながる。	I氏が何もかもできる人で、研究家だと分かっていたので、お任せして私はお手伝いした。 I氏が苦労してくれて、ありがたかった。こんなうれしいことはないと思った。うれしくて、家に帰ってきて泣いた。
④ 伝統野菜の名前(鈴ヶ沢なす)をきめたとき	伝統野菜に選定されるためには、名前が必要となってくる。そこで、伝統野菜に名前を付けようということになり、地域住民との話し合いがもたれた。	みんなで栽培して、誰が決めたわけでもなく鈴ヶ沢なすという名前になった。 この地域の名前が載ればうれしい。それはいいことだ。集落の名前が残る。
⑤ 伝統野菜を栽培する農法(米ぬか農法)をきめたとき	野菜の栽培法についても話し合いがなされた。農薬や化学肥料を使わない農業をめざし、地域の高齢者の知恵と経験に学び、昔ながらの方法での栽培を基本にすることを共有し、住民たちが実践してきた農法に近い、I氏が推進する米ぬか農法(環境保全型農業)をする。	それまでも栽培する前年には堆肥を作っていたから。 I氏から説明を受けて、いいことだと思った。

るという状況把握をしていった。次に、阿南町社協（農業おたすけ隊）は、住民が最期まで集落での在宅生活をするために、離農と荒廃農地の課題解決に向けて

高齢者農家を支援することを始めた。社協職員やI氏は何回も訪問して「（後に伝統野菜となる）なすが大事だ、うりが大事だ」と伝えていった。このことにより、住

インシデント	多 機 関	住 民
⑥ 伝統野菜を販売することになったとき	野菜の販売については、I氏と和合元気なむらづくり協議会と住民が連携する。販路の確保は地域の小中学校、保育所の給食に提供、農産物直売所、県内外の飲食店、町内の個人宅へ販売できるようになった。住民にも売り上げが配分できるようになった。	それまでは、自分の家で食べて、あまったら家に来た人にあげていた。まさか売れるとは思っていなかった。みんなで収穫した野菜をI氏にお願いして売ってもらうことにした。 このなすがお金になるのかと思った。なんといいことをしてくれるのだとうれしく思った。じゃあ、私も頑張って栽培しようと思った。
⑦ 就労支援センター（障害者の方々）が伝統野菜を栽培することになったとき	第1次産業と福祉を連携させる。農業就労チャレンジ事業を活用する。高齢者のための農業支援を障害者のための農業に応用する。就労支援センターが伝統野菜の生産の担い手になる。	（就労支援センターの伝統野菜担当の利用者が）10人ぐらい、ちゃんと作業をしてくれていた。よく働いてくれると思った。 利用者が大勢で「なす作りに来たよ」と言って、家まで来てくれた。お茶を飲みながら、利用者が自己紹介してくれて、仲良くなれた。夫が亡くなって、農作業ができなくなって、畑が草だらけにならないようにしなければならぬと思っていたときに、I氏から畑を貸してもらいたいと言われ、提供したが、栽培してくれてありがたかった。
⑧ 現在の活動について	地道な広報活動で「伝統野菜、農福連携」が注目され、多くの方の関心や協力が得られるようになった。伝統野菜に関するイベントを開催し、地域住民はもとより行政機関、研究者、学生、小中学生、パイヤー、国内外の視察者が訪れて利用者との交流が図られた。植え付けの作業を子どもも障害者も高齢者も学生も分け隔てなく協働することで、これまでにない交流が生まれ、自己以外を知り差別意識もなくなっているようである。楽しいところに人が集まり学びも深まっている。特に、小中学生との交流が始まり、給食に取り入れられたことは「福祉教育」、「食育」、「郷土愛を育む」ことなどへ発展していった。一流料亭の料理長が地区に来て、鈴ヶ沢なす、うり、南蛮を使った料理をし、それまでに関わった方々を呼んで提供してくれた。伝統野菜が料亭での料理を通して消費者に愛されていることが、生産者や関係者に理解できた。	IN氏が一生懸命になってやってくれている。五平餅とか焼きなすとか上手に作ってくれて、おいしかった。集まりに何回も行って、小学生や大学生や30人くらい集まることもあった。私の家にも何回も何回も来てくれて、漬物とか食べて「おいしい、おいしい」と言ってくれて、喜んでくれて、それが、嬉しい。施設に入所することになったときは、IN氏に「あとは頼むね」と伝えた。 本当に、ありがとうございます、感謝している。東京から一流の料理長が来て、なすがこんなにめずらしいご馳走になるのだと思った。お寺（会場）でにぎやかに、御馳走になった。この家にも、いろんな人が来てくれて、幸せだった。誰も来てくれなかったら、夕方までぼつんと一人で居るだけ。まさか、ここの野菜が伝統野菜になるとは思わなかった。野菜が儲かる、儲からないのは第二で、人が来てくれるのがうれしい。大勢の人と友達になった。
⑨ その他に	IN氏は地域おこし協力隊任期終了後に「地域おこし協力隊の3年の任期が終わってもこの地区に住む。この地区をなんとかする一人として頑張りたい」と決めて、阿南町集落支援員（臨時職員）として雇用継続された。就労支援センター農業担当職員T氏がこの業務がきっかけとなり、集落の住民となっている。	IN氏がときどき来てくれて元気になる。IN氏が、地域おこし協力隊の任期（終了）がきたときには案じていたが、「私はここに残るよ」と言ってくれてよかった。就労支援センターの農業担当職員T氏もここに住んでくれて、ありがたいことだ。 できれば、こういうことが続けられたらいいと思う。

民は「手伝ってくれて、うれしい。助けてもらえて、ありがたい」と感謝したり、「自分で種採りして栽培して、こんなことしていいのかなあと考えていたが、それで良かったのだ」と自己肯定できたりと、元気を取り戻していくことになった。

住民に農業支援でかかわるなかで、I氏は「在来の野菜の存在と足を知るという思いこそが、この集落固有の地域資源である。この地域資源を残すことが鈴ヶ沢集落を残すことにつながる」と考えるようになった。多機関の1つであるおひとよし倶楽部では、「残したい、伝えたい、山里の恵み」という理念のもと、集落で受け継がれてきた様々な地域資源を山里の恵みとして後世に残していこうという活動を始めた。それが、伝統野菜を栽培しようという取り組みとして顕現されることになった。これに対して住民は、「I氏が何もかもできる人で、研究家だ。お任せして私はお手伝いした」とI氏を受け容れて協働している。さらに、「I氏が苦勞してくれて、ありがたかった。こんなうれしいことはない。うれしくて、家に帰ってきて泣いた」と感謝を示している。

そして、伝統野菜の名前を決めるときも栽培する農法を決めるときにも、住民と多機関との話し合いがもたれている。伝統野菜の名前は、特定の誰かの主導により決められたわけではなく、鈴ヶ沢なすという名前になり地域の名前が残ることになった。栽培する農法は、農薬や化学肥料を使わない農業をめざした。地域の高齢者の知恵と経験に学び、昔ながらの農法での栽培を基本にすることを共有し、住民たちが実践してきた農法に近い、米ぬか農法(環境保全型農業)についての説明がI氏からなされた。これに対して住民は「いいことだ」と受け容れている。

伝統野菜を販売することについて、住民は「このなすがお金になるのか。なんといいことをしてくれるのだとうれしく思った。じゃあ、私も頑張って栽培しよう」と、この取り組みにさらに意欲的となった。I氏とむらづくり協議会と住民が連携することで販売促進され、住民にも売り上げが配分できるようになった。

伝統野菜の生産活動を継続するための人員確保が喫緊の課題となったときには、就労支援センターの利用者が伝統野菜を栽培することになった。これに対して住民は「(就労支援センターの伝統野菜担当の利用者が)10人ぐらい、ちゃんと作業をしてくれていた。よく働いてくれる」というように、新たな関係機関をよく観て肯定的に受け容れている。また、「利用者が大勢で『なす作りに来たよ』と言って家まで来てくれた。お茶を飲

みながら、利用者が自己紹介してくれて仲良くなれた。夫が亡くなって、農作業ができなくなって、畑が草だらけにならないようにしなければならぬと思っていたときに、I氏から畑を貸してもらいたいと言われ、提供したが、栽培してくれてありがたかった」というように、障害者との交流が楽しみになっており、就労支援センターの活動に感謝している。

現在、IN氏が事務局の役割を担い開催している伝統野菜に関するイベントについて、住民は、イベントを通して多くの方々と交流できることをとても喜んでいる。「野菜が儲かる、儲からないのは第二で、人が来てくれるのがうれしい。大勢の人と友達になれた」と、自宅に来訪するイベント参加者をこころよく受け容れている。また、販売された伝統野菜が東京の一流料亭で料理され、美味しい料理になること知り、この地域で代々栽培されてきた野菜の価値を再発見できている。とくに、IN氏の一生懸命な姿を観ており、A氏が施設に入所することになったとき、IN氏に「あとは頼むね」と伝えるほどの信頼関係ができている。これは、IN氏の地域おこし協力隊の任期(終了)が近づいたときに、「私(IN氏)はここに残るよ」と言ってくれたことをとても喜んでいることからわかる。さらに、就労支援センター農業担当職員T氏がこの業務がきっかけとなり、集落の住民となったことにも「ありがたいことだ」と言っていることから、T氏とも信頼関係ができていることがわかる。

3. 考察

鈴ヶ沢では、後に「信州の伝統野菜」と選定されるなす等の栽培を通して住民同士がつながりを持っていた。この地域が限界集落だと報道されたときには、当時の住民が集まって、集落に残るかどうかの住民投票を行っている。これらのことから、鈴ヶ沢モデルの特徴の1つとして、多機関がアプローチする以前に、住民同士のつながりと住民自治体制が構築されていたことがあげられる。住民と多機関が一体化する前段階で、住民同士のつながりと住民自治体制が基盤にあることで、その後の活動が展開していったと考えられる。

次に、多機関から住民へのアプローチであるが、鶯浦らは問題解決のプロセスにおいて「本人が主体となって自分に合致した生活を築いていくプロセスがおろそかにされ、本人の思いや意向とは異なった生活が専門職主導で形成されてしまうことがある」と指摘している⁹⁾。多機関からのアプローチでとくに重要になるのが援助者の存在である。はじめに述べた通り、限界集

落は全国的に拡大しており深刻な状況を迎えている。仮に、その地域での在宅生活を希望している住民があるとする。その際に、いまだ有効な社会的な支援が確立されていない状況では、ともすれば、肝心の住民の思いや意向が不在のまま、行政機関や専門職主導の生活支援が展開されることが危惧されるところである。しかし、鈴ヶ沢モデルでは、阿南町社協事務局長K氏、おひとよし倶楽部I氏、阿南町集落支援員(元地域おこし協力隊員)IN氏、就労支援センター所長H氏・農業担当職員T氏を中心とする援助者が存在していた。住民に寄り添いエンパワーメントし、状況に応じてコーディネーターやイネイブラーとなり、財源確保や組織運営ではマネジャーとなり、農業指導ではエデュケーターとなっている。援助者としての多様な役割をそれぞれがその状況に応じて果たしている¹⁰⁾。

まずは社協が先駆けとなり、住民の生活の場に出向いていき¹¹⁾、訪問を繰り返し状況把握と信頼関係の構築をめざしている。そこから、多機関が融合して住民が長年継続してきた農業(伝統野菜の栽培)を活用した援助を試みている。農福連携を活用した援助の展開過程では、取り組みの方向性を決めるインシデントごとに、住民と多機関との話し合いが行われた。住民の思いが尊重されつつ、多機関からは十分な説明と実践が果たされている。今回の聞き取りでは、住民から今後もこの取り組みの継続を願い「こういうことが続けられたらいい」という回答があったように、両者間の信頼関係にもとづいて一体化した取り組みが現在も展開されていると考えられる。

以上のことから、鈴ヶ沢モデルは、住民と多機関が一体化し農福連携を活用して限界集落がかかえる問題の解決をめざす取り組みであると考えられる。そして、この取り組みを可能にした要因としては、住民側の「住民同士のつながりと住民自治体制がすでに構築されていたこと」、多機関側の「多様な役割を果たす援助者が存在していたこと」があげられるであろう。

おわりに

住民への聞き取り調査終了後に、住民から「I氏とIN氏のおかげです」という意見があり、IN氏からは「もしもA氏やB氏ががいなかったら、私はただ<なす>を作っているだけだった。A氏やB氏が自宅に招いてくれて、お茶を出していただいて、集落で起こった昔からの話を聞かせてもらい、これは単なる<なす>ではない、その奥にあるストーリーを知ることができた。だから、この取り

組みを今も続けることができています」という意見があった。このことを踏まえても、鈴ヶ沢モデルが住民と多機関が一体化している取り組みであると考えられた。

しかし、本研究にはいくつかの課題も残されている。第一に、分析データを収集するための調査対象者を研究者が多機関へ依頼して有意抽出したことである。鈴ヶ沢モデルの中心的な役割や活動を担っていたと考えられる住民を有意によって抽出したもので、標本が母集団の真の代表であるという客観的保証が得られていない。第二に、データ数の問題である。この取り組みの中心的な役割や活動を担っていたと考えられる住民2名から収集したデータであり、十分なデータ数ではなかった。第三に、聞き取った回答の分析に質的データ分析を活用したことである。質的データの分析には、効果と限界があり、限界としては分析過程で研究者の主観や言語のあいまい性を完全には払拭できないことである¹²⁾。

これらいくつかの課題があり、今回の研究結果をもって一般化したとは言い難く、まだまだ集積しなければならぬことが数多くある。これらの課題については、今後の研究に期することにした。

謝辞

本研究について、ご多忙のところ聞き取り調査にご協力いただいた住民の方々および関係機関の皆様、また、貴重な資料の提供や調査対象者をご紹介いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

〈注〉

- 1) 濱田健司『農の福祉力で地域が輝く』創森社、2016年。
- 2) 厚生労働省・農林水産省『「農」と福祉の連携 福祉分野に農作業を～支援制度などのご案内～(2018年9月版)』農林水産省ホームページ。(http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kourei.html/2018/11/06)
- 3) 濱田健司『農福連携の「里マチ」づくり』鹿島出版社、2016年、19頁。
- 4) 限界集落とは、村落研究を続ける大野晃が、綿密なフィールドワークを経て「過疎」では表せない厳しい状況の集落があることを1988年に提唱した概念で、集落の状態区分のうち「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態

- にある集落。老人夫婦世帯、独居老人世帯が主」の集落のことである。
- 5) 『平成27(2015)年度過疎地域等条件不利地域における集落の現況把握調査報告書』国土交通省ホームページ。(http://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/kokudokeikaku_tk3_000010.html/2018/11/06)
 - 6) 合田盛人「多機関の活動が融合し限界集落の問題解決をめざす農福連携－伝統野菜を守り新たなつながりをつくる<鈴ヶ沢モデル>」『長野大学地域共生福祉論集』第13号、2019年、49-63頁。
 - 7) 長野県内の限界集落の1つに下伊那郡阿南町和合地区鈴ヶ沢集落がある。2018年10月現在で、4世帯7名(80歳代2名、70歳代2名、50歳代2名、30歳代1名。高齢化率57.1%)の住民が暮らしている。TVなどで限界集落の実態として報道された集落である。現在、この鈴ヶ沢では農福連携により、その集落だけで代々栽培されてきた野菜を伝統野菜として守る取り組みが行われている。先行調査において、この取り組みについて被調査者の合意を得て、「鈴ヶ沢モデル」と称することとした。
 - 8) 西山敏樹・鈴木亮子・大西幸周『データ収集・分析入門－社会を効果的に読み解く技法』慶応義塾大学出版、2013年。
 - 9) 鶴浦直子・廣瀬雅典・鈴木貴子・山下裕史・岩間伸之「本人が環境に働きかける「主体的適応力」に関する研究：ソーシャルワーク実践の本質への視座」『生活科学研究誌』第5巻、2007年、263-275頁。
 - 10) 福祉士養成講座編集委員会『社会福祉技術論Ⅰ』中央法規、2002年、200-201頁。
 - 11) 岩間伸之「地域のニーズを地域で支える－総合相談の展開とアウトリーチ」『月刊福祉』11月号、2016年、26-27頁。地域のニーズを地域で支えることについて、本人の生活の場に近いところへ出向き、本人を基点として援助を展開する実践の総体をアウトリーチと定義し、アウトリーチの実践は、地域における新しい「つながり」の構築と多様な「支え合い」の創造にあると述べている。
 - 12) 林俊克『Excelで学ぶテキストマイニング入門』オーム社、2007年、49頁。

<参考文献>

- 牛野正・中野裕子・林賢一「農業における知的障害者雇用に関する一考察」『農村計画学会誌』第25巻No.4、2007年、556-563頁。
- 大野晃『山村環境社会学序説－現代山村の限界集落化と流域共同管理－』農山漁村文化協会、2008年。
- 大野晃『山・川・海の環境社会学 地域環境にみる<人間と自然>』文理閣、2010年。
- 佐藤郁哉『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社、2013年。
- 田垣正晋『これからはじめる医療・福祉の質的研究入門』中央法規、2008年。
- 中嶋信・神田建策編『地域農業もうひとつの未来－農政転換を足元から－』自治体研究社、2004年。
- 林賢一「障害者の就労の場としての農業の可能性を探る」『技術と普及』11月号、一般社団法人全国農業改良普及支援協会、2003年、52-56頁。